



若者

東京・渋谷で10月中旬、1日限りの上映会があった。映画のタイトルは「マジでガチなボランティア」。会場は茶髪の若者たちであふれかえっていた。会を主催したのは、インカレサークルNGO GRAPHS。カンボジアに小学校や病院を建設する学生ボランティアの団体だ。その中心的人物で、「ギャル男」風の石松宏章さん(25)は東京医科大では照れ笑いしながら、こう振り返った。

「最初は、企業などに支援を求めても、なかなか理解されなかったんですよ」

日々の生活に飽き飽き

開業医の家庭で育った石松さんは5年前、大分県の進学校から同大に進んだ。1年生の終わり頃、医大生と女子大生とのパーティーサークルを発足させた。深夜まで飲んで、カラオケで歌っての毎日。ところが、2年生の秋頃には遊びばかりの生活にマンネリを感じるようになっていた。

そんな時だ。別の私立医学部に通う友人から、興味深いメールが届いたのだ。

「カンボジアに小学校を建設し

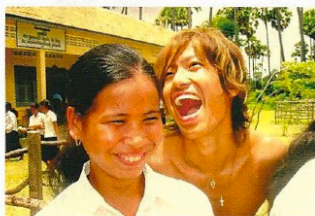
カンボジアで学校と病院建設

マジでガチなギャル男たち

茶髪の学生が女子大生とパーティーを続けながら、途上国に学校や病院を建てられないか考えた。彼らのパワーは映画や文庫本に。結構やるもんだ。



現在は医大生や文系学生などメンバーは約50人。石松さんらの意志が貫かれている



スタディツアーとしてメンバーとともに現地を見学に行った石松さん

てみないか」

生活に飽き飽きしていた石松さんらは「軽いノリ」で引き受けると、仲間と動き始めた。パーティーのチケット代から会場費などを差し引いた「あがり」を建設費用に充てよう、そして、現地の建設や運営はNGOに任せよう——と青写真を描いていたという。

計画どおりに事は進んだ。5回のパーティーを催して、集まったお金は約150万円。その資金を使って、2006年8月、カンボジア中央部の農村地帯に約300人が学べる「グラフィス小学校」を建てた。

その後、彼らは約15万円の旅費を出し合って建設現場や村人の生活を見学する「スタディツアー」を行った。そこで彼ら

は村人たちの貧しい生活を目の当たりにし、再び動き出さされる。

「乗車代を払える人の家にしか救急車が来ない実情にショックを受けた」(メンバー)

平屋の診療所が完成

村の診療所は名ばかりで、消毒が徹底されず常勤の医師すらいなかった。そうした光景をみたメンバーから、「次は病院を」

の声が上がったという。

「学校ほど簡単じゃない」

そう反対して脱会する仲間も出たが、強い思いがメンバーを動かした。今度は病院建設へ。そして、目標の400万円を工面し、平屋の診療所が今春完成。夏には診療所と国道を結ぶ全長8キロの道路も開通した。

卒業間近とあって石松さんはすでに代表を後輩に譲ったが、サークルは今も、建設した学校と病院の内容を充実させようと活動を続けている。

チャリティーイベントも「ラブチャリ」と名付け、現在では全国約80の大学の学生が参加している。

石松さんは言う。

「もし大学教授から『途上国を救う解決策を考えよ』と課題が出たら、『政治家がしっかりしなければならぬ』などと評論家のようなことは言わずに、僕は仲間と現地で活動した実績そのものを答えたかったんです」

映画「マジでガチな——」。

石松さんたちの活動を綴った同名の文庫本も上映会とほぼ同じ時期に発売された。

編集 大東史朗